論文審査の結果の要旨

氏名　佐々木　由香

本研究は、日本列島における縄文時代の遺跡から得られた植物遺体から、縄文時代の植物資源利用体系を復原し、生態系とのかかわりを明らかにしたものである。植物遺体は保存性が低く、これまでは断片的に種名が記載されることが多かったが、遺跡の調査方法を再検討し、多様な植物遺体を産出状況から加工方法、遺体群形成過程、保存性を検討する方法を導き出し、植物のどの部分が、どのように利用されていたかを明らかにしており、植物資源利用の研究において画期的な段階をもたらすものである。

論文の第 2 章では、まず植物遺体とは何かを明らかにし、植物資源利用を明らかにするための目的にかなった方法について論じている。縄文時代の植物利用に実態を明らかにするには、種実や木材といった植物の器官ごとに蓄積された情報を、それらの母体である樹木などの植物資源に戻して、集落周辺の植生とともに人間と植物とのかかわりかたを明らかにする必要があると論じ、種実や木材を中心に量的な解析が可能な低地で利用された植物遺体の産出状況を記載し、これらの膨大な資料蓄積にもとづいて植物の利用状況を整理するという方法を提案している。その上で、この論文で扱う植物遺体の範囲を明確にし、遺跡出土植物遺体や植物利用、環境史、栽培植物に関わる研究史を概説している。なお、分析方法や試料保管方法などの詳細は付編としてまとめられている。

第 3 章では、縄文時代中期から晩期にわたる植物利用の変化を、時間的に連続的に検討できる東京都東村山市下宅部遺跡を調査対象にして、主として種実、遺構構成木材、サルノコシカケといった複数の遺体群の解析を行い、植物資源利用の実態と、環境変遷の中で生態系と植物利用がどのようにかかわって変化していったかを明らかにしている。その結果、植物資源利用においてはクリとウルシが強く結びついており、森林資源管理と利用のもとに、野生植物の木材や種実の利用をはじめ、栽培植物の利用や編組製品の製作などが行われていたことを示している。

第 4 章では、下宅部遺跡で見出された種実利用と、栽培植物利用、編組製品の普遍性と地域性、時間差を確認するために、縄文時代早期から弥生時代初頭にかけての植物資源の実態を上記の 3 種類の遺体を対象として解析している。

第 5 章では、主としてトチノキなどの堅果類のアク抜きの場としてしか捉えていなかった「水場遺構」の意味を問い直すために、全国の水場遺構を集成して、縄文時代における水利用の体系や建築材として用いられる木材の選択性について論じている。

第 6 章では、全国にわたってウルシの利用がクリを中心にした森林資源管理・利用にいかに即したものであり、クリと結びついた地域性があり、縄文時代において一つの資源利用体系を形成していたことを論じている。

第 7 章では、第 3 章から第 6 章までを総覧して、日本列島における時空間での変化や利用の画期について検討している。その結果、縄文時代早期後半に縄文時代を特徴付け

る植物資源利用が成立していたことを確認している。本州西半部と九州ではイチイガシの果実利用に特化した植物資源利用が見られるのに対して、本州東半部では居住域周辺に人為的に管理されたクリとウルシの植物資源を基盤にした栽培植物の種実利用を含む植物資源利用が成立していたことを見出している。

第 8 章では、本州西半部を中心にした植物資源利用の範囲をイチイガシ利用文化圏、本州東半部を中心にした範囲をクリーウルシ利用文化圏と呼び、二つの利用文化圏の植物資源利用のあり方は大きく異なることを論じている。さらに、縄文時代から弥生時代にかけての植物資源利用の様相を捉えなおし、本州東半部では低地に大規模な水稲耕作が展開する弥生時代中期までは、縄文時代の植物資源利用のあり方が維持され、弥生時代の植物利用を受け入れる上で基盤となっていたことを論じている。

このように、本論文は、1 万年間という長時間におよんだ縄文時代において、東西の二つの植物資源の利用文化圏があったことを初めて明らかにし、植物資源利用と生態系とのかかわりを明らかにした。自身による詳細な植物遺体研究が下宅部遺跡に限られており、さらに詳細な検討が全国の主要な遺跡におよぶことが望まれるところではあるが、今後の調査のあり方や植物資源利用の捉え方を明確に打ち出している点で、今後の研究の発展に寄与するところは大きいと評価できる。

以上のように、本論文は、博士（環境学）の学位を授与できるものと認める。